芸術体験で良き医療者に

岡山大教員らがワークショップ

医師や看護師を対象に、アートを取り入れた全国でも珍しいワークショップを岡山大教員らでつくるグループが始めた。芸術鑑賞や創作を通じて共感力、観察眼などを磨き、病状、精神状態、生活実態など多様な背景をもつ患者とのコミュニケーション力を高める目的だ。代表の木股敬裕形成外科教授は「自身を見つめ直し、より良い医療者を目指す契機になれば」とする。

（田井香菜子）

心に浮かんだ情景を描いた絵について語り合う参加者たち＝9日、県立美術館

共感力、観察眼磨き 患者との関わり方追求

スケッチ用紙にクレヨンや絵筆を走らせるのは30～50代の現役医師や看護師、病院職員たち。ワークショップの初回は9日、岡山県立美術館（岡山市）で開かれた。県内各地から6人が集まり、プログラムの一つ「ドローイング」では心に浮かんだ情景を自由に描き、発表し合った。

険しい山や黒雲のある風景画を描いた参加者は「人生がどこに向かうのか、迷いがある」と絵に込めた心情を吐露。他の参加者は「不安な思いが伝わってくる」「風の描写もある。しばらくしたら青空になるかも」と共感したり、独自の見方を伝えたりした。

美術館の作品への感想を述べ合うプログラム「対話型鑑賞」なども実施。岡山大病院の看護師原田延枝さん（54）は「普段とは違う形でコミュニケーションを取りながら、思いを認め合う作業を体験できた。多様性を受け入れる大切さを改めて感じ、職場でも生かしていきたい」と話した。

木股教授は2017年から、良き医療人になるために欠かせない観察力や表現力を育もうと、同大医学部の学生向けにアートを活用した授業を導入。好評なためグループ「Well Art Okayama」を立ち上げ、現役の医療者に対象を拡大した。

木股教授は「医療が進歩しても、生身の患者との関わり方にマニュアルはない。ワークショップを通じてケアのあるべき姿を追求してみてほしい」と話す。

今後は年2、3回開催して受講者を増やしていくという。

（C）山陽新聞社　無断複製・転載を禁じます。

2023年10月22日 山陽新聞朝刊 28ページ